HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シャルル・フーリエと周期性
Author(s)	大塚, 昇三
Citation	經濟學研究, 57(3), 13-28
Issue Date	2007-12-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30328
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES57(3)_13-28.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 57−3
北海道大学 2007.12

シャルル・フーリエと周期性

大 塚 昇 三

Ⅰ．はじめに

フーリエが論じ続けた主題は農業協同組合論であった。その内容は，たとえばこう要約できる。5キロ四方ほどの敷地に共同住宅と農場や製造作業場をそなえ，人員規模は1,600人ほど，株式会社形態で運営される農業協同組合，フーリエはこれをファランジュとよび，調和社会の基本単位とする。このファランジュで共同生活をいとなむ人々は，生産活動から日常生活や娯楽にいたるまですべて集団でおこなう。そうしてはじめて人々の情念が解放されるはずである。かれらは気の向くままに多様な労働に参加したり，複数の配偶者と自由に性愛をいとなんだりする。この労働や性愛は，血縁者以外の人々のあいだにも濃密な絆をつちかっていくだろう。それらの絆をチャンネルにして富裕者から貧者へ所得が移転され，財産が遺贈されていく。だからファランジュは，あたかも一つの家族のように機能し，人々の情念は調和するだろう。フーリエは，こんな農業協同組合ファランジュのさまざまな魅力や経済的利益を飽くことなく説き続け，世界中に300万のファランジュが設立されて相互に交流し，世界の調和が実現されるのを待ち続けたのである[1)]。

1) 本稿では，フーリエの主著である『四運動および一般運命の理論』(1808年)，『家庭・農業組合概論』(1822年)，『産業および組合新世界』(1829年)，『贋産業論』(1835−1836年)については，それぞれつぎのテキストを使用している。Fourier, Charles, *Théorie des quatre mouvements et des destinées générales*, Leipzig, sans nom d'auteur, 1808. これについては以下，Fourier, *Théorie des quatre mouvements*,と略記する。Fourier, Ch., *Traité de l'association domestique-agricole*, Paris et Londres, Bosssange et P. Mongie, 1822, 2 vol.これについては以下，Fourier, *Traité de l'association domestique-agricole*,と略記する。Fourier, Ch., *Le Nouveau monde industriel et sociétaire*, Paris, 1829. これについては以下，Fourier, *Le Nouveau monde industriel et sociétaire*,と略記する。Fourier, Ch., La *Fausse indutrie morcelée, répugnante, mensongére*, Paris, Bossange, 1835−1836, 2 vol.これについては以下，Fourier, *La Fausse industrie*,と略記する。本稿におけるこれらの引用・参照箇所については，それぞれアントロポ版フーリエ全集(*Œuvres complètes de Charles Fourier*, 12 vol., Paris, Éditions Anthropos, 1966−1968. これについては以下，*Œuvres*,と略記する。)の巻数と頁数も併記した。ここで，各引用・参照箇所についてひとことのべておく。フーリエは「普遍調和」という論説を1803年12月3日の『リヨン新報』に掲載し(Fourier, Ch.,"Harmonie universelle", *Bulletin de Lyon*, 1803, 3 décembre(11 frimaire an Ⅻ))，そこで初めて自説を公表したが，それを1808年に『四運動および一般運命の理論』で展開した。この内容をフーリエは，その後に公刊した著作や草稿のなかで，晩年にいたるまで，ときには詳細に，ときには簡潔に整理したかたちで，繰り返し論じつづけた。したがって筆者が，ある論題について複数の著作にまたがって引用する場合もでてくる。けれどもそれは，けっして文脈を無視して引用しているのではなく，それぞれの論題で適当と思われる説明を，幾通りもある説明のなかから選んで引用しているのである。なお，上記のフーリエの「普遍調和」という論説は，『シャルル・フーリエの草稿発表』の第1巻(1851年)に掲載されているが（Fourier, Ch., *Publication des manuscrits de Charles Fourier*, vol.Ⅰ, année 1851.)，これはアントロポ版フーリエ全集の第10巻におさめられている(*Œuvres*, t.Ⅹ,pp.52−53.)。また，ビーチャーは，この論説がフーリエの諸観念を初めて公表したものとして評価し，その全文を英語に訳出している。Beecher, Jonathan, *Charles Fourier, the visionary and his world*, University of California Press,1986, pp.104−105(以下，Beecher, *Charles Fourier*,と略記).ジョナサン・ビーチャー，福島知己訳，『シャルル・フーリエ伝——幻視者とその世界』，作品社，2001年，98−99頁（以下，福島訳『シャルル・フーリエ伝』，と略記)。なお，訳語はかならずしもこれによっていない。以下，同様。

とはいえ，こんなふうにフーリエの主張をまとめてしまうと，フーリエの思想全体の包括的な理解からは遠ざかってしまう。農業協同組合論が埋め込まれる文脈をかいつまんで紹介すると，こんな具合になる。すなわち，諸惑星は巨大な魂をもつ両性具有の生き物で８万年の寿命を持ち，そのうちの７万年が幸福な調和期で，その調和期をはさむ最初の５千年と最後の５千年が不幸な混沌期である。ちなみに，われわれの生きる文明社会は，その最初の不幸な混沌期にある。そして調和期には反ライオンなどといった人間の乗り物になるような新種の生物が創造されて活躍し，世界は農業協同組合ファランジュでおおいつくされるだろう。生きている惑星はいずれ年老いて終末をむかえ，そこで暮らしていた人間の魂は惑星の魂と融合し，その惑星を離脱する。惑星の魂は別の若い惑星で転生し，そこでふたたび新たな８万年の生涯を始めるのである[2)]。フーリエは，こうした絵空事としかおもえないような話しを淡々と，疑わしさなど微塵もないといった調子で論じる。そうかとおもえば，混沌期に属する文明社会について，きわめて現実的な話しもする。おりからの食糧不足のなかで投機目的で買った米を，値上がりを待つあいだに腐らせてしまい，商店員のフーリエみずからがその処分にあたったという，いわば生々しい内部告発もおりまぜながら，じつに現実感覚に富んだ商業批判を展開する[3)]。こんな異質な叙述がどの著作のなかでも肩を並べており，そういう思想の全体像は，科学的な見方になじんでいる現在の読者にとって容易に理解できるものではない。

フーリエ自身は，問題設定については，1808年に公刊した『四運動と一般運命の理論』の冒頭で，「農業協同組合」と「情念引力」という二つの部門の研究が「運命の理論」の解明につながるとのべていた[4)]。この意味合いを，主要著作や草稿の説明をふまえて，あえておおざっぱに整理すると，こうなる。すなわち，われわれの生きる文明社会のように情念が抑圧されると，その結果として社会では家族エゴイスムをはじめ随所でエゴイスムが横行し，個々人や諸階層の利害が対立して無秩序におちいる。しかし，農業協同組合が組織されて情念が解放されると，社会の利害対立は解消されて世界は調和する。そうした無秩序の時代と調和の時代のあり方を包括的に示すのが「運命の理論」である。この理論をささえるひとつが「農業協同組合」にかんする具体的な詳細であり，もうひとつが，無秩序と秩序あるいは混沌と調和の構造的特徴や，万物の運動とその移り行きなどを情念の働きと関連づける「情念引力」説である。この後者の内容は，宇宙開闢説や，物質界と情念を照応させるアナロジー論を含んでおり，それはいわば宇宙論であった。

さて，こんなフーリエの思想を，近年，ひとつの全体として理解しようとしたのがジョナサン・ビーチャーであった。フーリエの諸観念をむすびつける内的な論理を探求するなかで，あつかいがむずかしい宇宙論もていねいに分析し，これをビーチャーはアナロジー思考にかんする古典的・キリスト教的伝統の延長線上に位置づけた。その伝統とは，自然界を，人間がかかわる事柄や人間自身を映し出す鏡とみなすアナロジー思考である。とはいえ，先行する思想家たちの考え方，すなわち，宇宙は人間の鏡だから，宇宙の自然な秩序が，現存する事物の秩

2）Fourier, *Traité de l'association domestique-agricole*, t. I, pp. 247–248, 528–529（*Œuvres*, t.Ⅲ, pp.325–327, et t. Ⅳ. pp. 254–255.）. また，つぎの箇所も参照。Fourier, *Théorie des quatre mouvements*, p. 53 sqq（*Œuvres*, t. I. p. 33 sqq.）. シャルル・フーリエ，巖谷國士訳『四運動の理論』（上），現代思潮社，1970年，70頁および以下。なお，訳語はかならずしもこれによっていない。

3）*Ibid*., p. 337 （*Œuvres*, t. I. p. 239.）. 同書，（下），83頁。

4）*Ibid*., p. 1（*Œuvres*, t. I. p. 1.）. 同書，（上），13頁。

序を正当化する根拠になるといった考え方は，フーリエにはない。フーリエにあっては，モデルになる秩序がすでに存在するのではなく，これからその秩序を生み出さねばならない。そう考える点でフーリエはロマン主義思想家であった。つまり既存の世界のかなたにある理想世界をさししめすためにアナロジー思考を活用する思想家のひとりであった。このようにビーチャーは，フーリエの宇宙論を，アナロジー思考にかんする古典的・キリスト教的伝統のロマン主義的再編という知的文脈に位置づける。さらに，自分のイメージやアナロジーを駆使して世界の隠された統一性を明るみにだすのが詩人だとする考え方からすれば，フーリエはまさしくその詩人であり，かれはロマン主義運動の担い手であるばかりでなく，その次世代の象徴主義詩人にも接続できるとした[5]。

そうした分析をふまえてビーチャーは，宇宙開闢論やアナロジー論をフーリエの思想全体のなかでどう扱うべきかはまだ明らかでないとしながらも，人間と人間的事象を宇宙全体の中心にすえ，これらの動きが，情念と事物との照応関係をとおして，宇宙全体を制御し発展させていくというフーリエの思想のなかに，詩や神話がもつ力をみいだしている[6]。

このビーチャーのフーリエ理解はじつに興味深い。物理的事象を人間的事象すなわち情念的事象に対応させて，この情念的事象から宇宙全体のありようを考えていくあたりに，フーリエの生命力がつよく現れているようにおもわれるからである。だが，時代は，フーリエの考え方とは逆に，人間的事象と物理的事象の照応関係など非科学的なものとして否定し，両事象を切断する方向へむかっていくだろう。フーリエの教説を普及させようとしたフーリエ派領袖のヴィクトル・コンシデランからして，のちにみるように，すでにそういう方向をむいていたのだから[7]。

ところで，本稿も，フーリエの諸観念の内的なつながりを包括的に理解しようとするものだが，ここではその手がかりを探るために，宇宙論と農業協同組合論の各所に表出しているフーリエ独特の時間感覚に着目したい。そして，フーリエがえがきだす時間には，数種類の長さの周期がきざみこまれていることを明らかにしたい。

それらの周期の析出作業に入るまえに，次節ではまず，フーリエの「情念」にかんする基本的な説明をみておく。それなしにはフーリエの叙述は理解できず，ここで周期性を検討するにあたっても，その情念論の基本認識は不可欠だからである。そうして，フーリエが『四運動と一般運命の理論』で論じた惑星の 8 万年の移り行きを分析し，この 8 万年が魂のいとなみの周期にほかならないことを確認する。第三節では，三つのトピックをとりあげて，それぞれのケースで周期性を確認していく。その一つ目で，ひとつの惑星上で 8 万年のあいだに個々の人間の魂が転生を繰り返すありさまを検討し，そこから人間の魂の転生にかかわる約 100 年の周期を析出する。そして今度はファランジュの

5）Beecher, *Charles Fourier*, pp. 347–349. 福島訳，『シャルル・フーリエ伝』，296–297 頁。

6）*Ibid*., pp. 350–352. 同書，298–300 頁。

7）1828 年にパリの理工科大学校を卒業し，士官候補生としてメスの工兵隊に入隊したコンシデラン（1808 年生–1893 年没）は，その後，1832 年のフーリエ派機関紙『ファランステール』の創刊をはさんで，メスをはじめフランス各地でフーリエの教説を解説する公開講座を開き，その普及につとめた。1833 年の秋，オルレアンで公開講座を開いていたころ，コンシデラン自身，フーリエの教説のわかりやすい解説書の必要性を痛感したらしい（cf. Beecher,J., *Victor Considerant and the rise and fall of French romantic socialism*, University of California Press, 2001, p.61.）。そしてみずからその解説書として『社会の運命』を著し，第 1 巻を 1834 年に刊行した（Considerant,Victor, *Destinée sociale*, Paris, t. I, 1835.）。のちにみるように，コンシデランによるフーリエ解釈の方向性は，この著作のなかで確認できる。

日常生活に目を転じ，二つ目のトピックとして，組合ファランジュで機能するはずの多婚制度をとりあげる。組合員それぞれの配偶者との関係を分析し，そこから数ヶ月から数十年の周期を析出する。最後に三つ目のトピックで，組合員の労働現場における短期就労という労働のあり方をとりあげる。人々が仕事に飽きないように複数の作業場を短時間で移動する様子を分析し，そこから就労時間を区切る1時間半から2時間の周期を析出する。なお，これらの事例分析では，それぞれの周期性の根拠として，情念のひとつである移り気情念があげられることも指摘しておきたい。

本稿では，このようにフーリエの宇宙論や農業協同組合論に表出している時間の流れ方に着目し，そこに周期性がみられることを明らかにしたい。ただし，ここでは，そうした周期性が，フーリエの思想全体の内的なつながりを説明する上でどのような意義をもつかは，明示的にのべられない[8]。けれども最後に，ヴィクトル・コンシデランは，フーリエの教説を解説するなかで，周期性がきわだつ惑星の魂の転生をどう取り上げたか，その取り上げ方を，フーリエ派のバイブルとされる『社会の運命』[9]で検証し，そこではフーリエにみられる周期性がわかりづらくなっていることを指摘して，本稿のむすびにかえたい。

Ⅱ．宇宙的時間の周期性

前節でフーリエの思想をかいつまんで紹介するさい「情念」という言葉を使ったが，周期性の分析にも不可欠な情念にかんする基本的な説明を，まずここでみておく。

フーリエは，情念を欲望ないし欲求あるいは衝動とほぼ同じようにもちいており，情念が欲する対象に向かう力を「情念引力」とよぶ。そしてこの「情念引力とは，熟慮反省にさきだって自然によって賦与され，理性や義務や偏見などに抗して存続する衝動である」と定義する[10]。

さらにフーリエは，情念を，情念引力が作用する対象に応じて「感覚情念」「集団情念」「配分情念」の3つのカテゴリーに分類する。まず「感覚情念」は，五感の対象に応じて味覚，触覚，視覚，聴覚，嗅覚の5つの情念に細分される。これらは五感の対象つまり物質的ないし肉体的な対象をめざす。二つ目の「集団情念」は集団を形成する感情の絆をめざし，絆の種類に応じて，友情，恋愛，野心，親子の4つの情念に細分される。三つ目の「配分情念」は，感覚情念と集団情念とのバランスのよい充足をめざす情念で，「陰謀情念」，「移り気情念」，「複合情念」の3つに細分される。「陰謀情念」は党派精神ともいいかえられ，野心家たちや商人仲間，それに売春婦たちに典型的にみられる嗜好で，集団同士の関係のなかに競争をうながすような分裂や不和をもたらす情念だという。「移り気情念」は，「享楽を変化させる欲求，快楽から快楽へ飛び回る欲求」つまり快楽の多様性をもとめる情念である。そして「複合情念」

8）シュルレアリスム運動を指導したアンドレ・ブルトンがフーリエを高く評価したのはよく知られているが，ジラールは，社会の領域ばかりでなく精神の領域においても最大の自由をめざすという方向性をシュルレアリスムの特徴のひとつにあげ，フーリエとシュルレアリストたちのあいだの，発想やイメージの構成の仕方にかんする親近性を論じている。Girard, G.,“De l’autre côté du pont, les paysages harmoniques. Fourier et le surréalisme”, *Cahier Charles Fourier*, nº 17, 2006, pp. 75–88. フーリエの内的な論理には，やはりシュルレアリスムがもっとも肉迫できるのかもしれない。

9）Considerant, *op.cit*.

10）Fourier, *Le Nouveau monde industriel et sociéaire*, p. 57（*Œuvres*, t. Ⅵ, p. 47.）.シャルル・フーリエ，田中正人訳『産業的協同社会的新世界』，五島茂，坂本慶一編『オウエン，サン・シモン，フーリエ』，世界の名著，第42巻，中央公論社，1975年，所収，495頁。なお，訳語は，かならずしもこれによっていない。以下，同様。

は，上記の感覚情念と集団情念をバランスよく充足していこうとする情念である。ちなみに，陰謀情念がライヴァル集団の励まし合いの競争をあおる情念で「熟慮にもとづく激情」といわれる一方，複合情念は「理性的思考の最大の敵」で「諸情念のなかでもっともロマンティックな情念」とされ，対立する集団を和合させたり，精神と肉体のバランスをとったりする。このようにフーリエは，5つの感覚情念，4つの集団情念，3つの配分情念，合計12の情念をすべて，強弱の差はあれ，一人の人間がそなえるとし，これらの情念がすべて充足されてはじめて人間は幸福になる，というのである[11]。

以上がフーリエの情念にかんする基本的な説明で，これをふまえて周期性の分析にはいりたい。

さて，フーリエは，多くの惑星を人間と同様に肉体と魂をかねそなえた生き物で，成長しては老衰し，8万年ほどで寿命を終えると考える。惑星が寿命を迎えるとき，惑星上で生きていた人間の魂は惑星本体の魂と融合し，一つの巨大な魂となってその老惑星を離脱する。巨大な魂は別の若い惑星に宿ってそこで人間の魂を放射し，その新たな惑星上でふたたび8万年の人類史を始める。こんなふうに惑星の魂は8万年ごとに惑星から惑星へと転生を繰り返していく，というのである[12]。われわれは，ここでまず，この惑星の寿命とその魂の転生にかんして8万年の周期をみることができる。

この周期性は，たんに8万年という時間的長さについてみられるだけではない。フーリエは，魂が転生するたびに，どの惑星上でも人類が幼年期から成長期へ，そして衰退期から老衰期へ，というぐあいに同じパターンの経過をたどると考えていた。つまり周期の8万年のあいだには，その経過内容についても反復繰り返しがあるとしていたのである。

その8万年の人類史の経過内容については，フーリエが 1 枚のシートに図式化しているが，これを簡略化して紹介しよう[13]［図1を参照］。

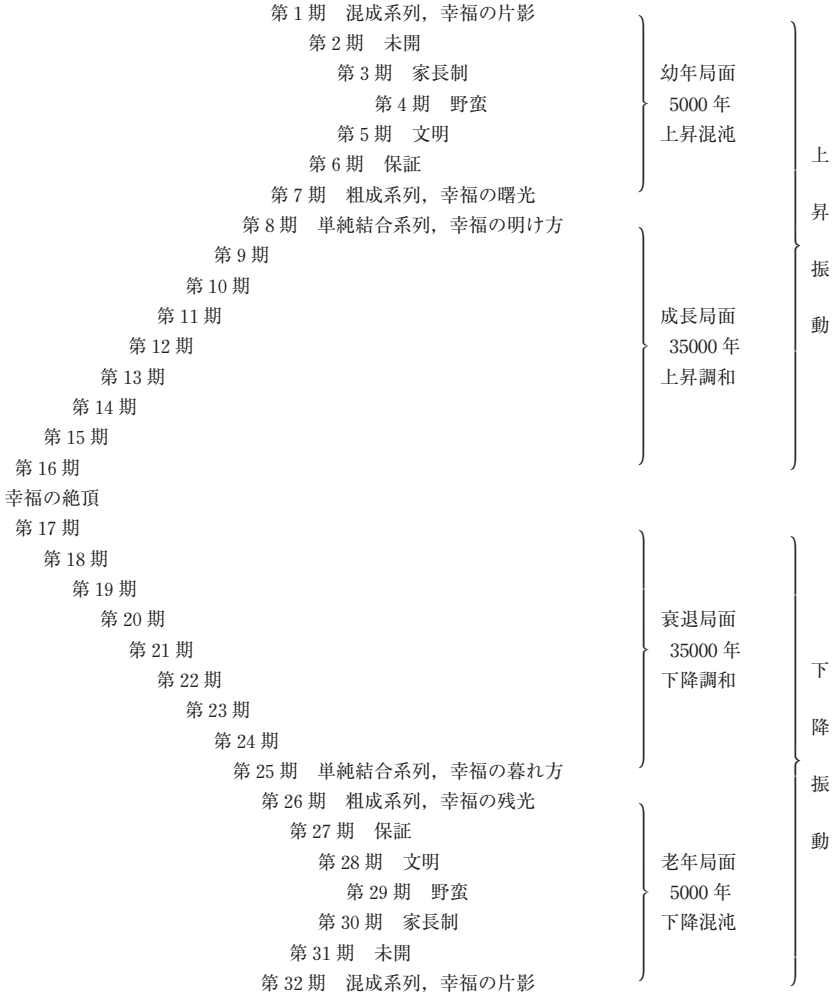
フーリエは8万年にわたる人類史をまず「上昇振動」と「下降振動」というように二等分する。その前者をさらに「幼年局面」の5千年，ついで「成長局面」の3万5千年とにわけ，その後者もさらに「衰退局面」の3万5千年，ついで「老年局面」の5千年とにわける。これら

11）*Ibid.*, pp. 57−62（*Œuvres*, t.Ⅵ .pp. 47−51.）．同書，495−500頁。

12）Fourier, *Traité de l'association domestique-agricole*, t. Ⅰ, pp. 247−249（*Œuvre*, t, Ⅲ, pp.325−327.）. なお，個々人の魂が地球上で転生を繰り返して8万年を過ごしたあと，今度は他の惑星に転生することについては，フーリエはすでに1808年に公刊した『四運動と一般運命の理論』のなかで簡単に指摘している。Fourier, *Théorie des quatre mouvements*, p. 52（*Œuvre*,t.I,pp.33,）.巌谷訳，前掲書，68〜70頁。一方，ここでおもに参照している『家庭・農業組合概論』では，人間の魂と惑星の魂との関係，そして融合した魂の8万年ごとの転生について，かなりまとまったかたちで説明している。

13）この図1は，フーリエの「社会運動の推移表」をもとにして，新種の生物の創造や，惑星の発情のしるしとされる北極冠の誕生と消滅，その他のこまかな規定は大幅に省略し，第1期から第32期までの社会の発展段階をしめす数字の位置を強調するために筆者が作成した。フーリエの「社会的運動の推移表」は，『四運動および一般運命の理論』の1808年の初版本では，56頁と57頁のあいだに，56頁と記されたシートで折り込まれている。また，アントロポ版全集第1巻の『四運動および一般運命の理論』では32頁と33頁のあいだに折り込まれている。*Ibid.*, p.56（*Œuvres*, t.Ⅰ. pp. 32−33.）. なお，巌谷訳では『四運動の理論』（上）の巻末に折り込まれているが，これは初版本を底本にしている。また田中訳でも前掲書の巻末に折り込まれているが，こちらは1846年の第3版を底本とし，書き込みが若干増えている。また，初版本の混成セクト，粗成セクト，単純結合セクトといった用語が，こちらではそれぞれ混成系列，粗成系列，単純結合系列に改められている。フーリエは『家庭・農業組合概論』以降，「セクト」ではなく「系列」を使っているので，図1でも後者に統一した。

図1　人類史の推移



合計四つの局面は，それぞれ順に「上昇混沌」，「上昇調和」，「下降調和」，「下降混沌」ともよばれる。フーリエによれば，8万年の最初と終わり，すなわち上昇混沌と下降混沌の時代が不幸の時代で，それ以外の上昇調和と下降調和が幸福の時代になるという。

さらに，この図1をみると，まず，第1期から第32期といった数字の位置が，上下対称になった波動をえがいているのがわかる。これらの数字は，8万年のあいだに人類がたどる成長と衰退の各段階をさしている[14)]。フーリエによれば，これらの数字の位置は，各発展段階の幸福度を示す。つまり，その位置が左に行くほど幸福度が増し，逆に右へ行くほど幸福度が減少して不幸になるということである。

ちなみに，フーリエは，幸福とは「たくさん

14）なお，1803年12月3日の『リヨン新報』に掲載された論説「普遍調和」では，「16の社会秩序の理論」という表現がみられる（これの掲載箇所については，本稿の注1を参照のこと）。だからフーリエは，『四運動および一般運命の理論』を公刊する以前には，人類史を32期ではなく，16期に区分して考えていたようである。

の情念をもち，それらの情念を満足させるたくさんの手だてをもつことにある」という。したがって，惑星で生きる人々が「享楽を味わう手だてとは釣り合わないような情念をもつ」場合，不幸だという[15]。このように幸福は，情念が充足されるかいなかにかかわっているのがわかる。

そしてこれらの幸福度の変化をしめす波動のような形が，本稿でまず着目したい 8 万年の周期の直感的な表現だといえる。

フーリエの説明にそって第 1 期から第 7 期まで，それぞれの発展段階の特徴を簡単にみておこう。

第 1 期は「混成系列」とよばれる。この「系列」というのは，本稿の「はじめに」でのべた農業協同組合ファランジュを構成する単位集団をさすが，その原初的なものが，ここにある混成系列をさす。つまり，人間が創造されてまもなく本能的に形成された，組織化されてはいないものの，かなり幸福を享受できる集団をさす。人々には偏見がなく，自由な性愛もいとなまれ，活力があって寿命も 120 才ほどであった。また経済的な平等はなく，段階づけられた不平等があったが，人々は幸福であった。けれども食料が豊富なため人口が急増し，それで貧困が発生する。この貧困から身を守るために自由な性愛を制限して婚姻制度を導入し，家族単位で所有の永続化をめざすようになったという[16]。

婚姻が定着して第 2 期の「未開」がはじまる。婚姻制度によって家族単位の収入や財産が一般化する一方で，人口増加により貧困が悪化して争いごとが増え，貧しい家族の子供たちに根深い憎しみが培われていくという。束縛を嫌う未開人は産業を嫌悪するとはいうものの，女性は一般的に抑圧されている。この末期には被征服民を奴隷化し始める[17]。

第 3 期は「家長制」である。家族の孤立化がすすむなか，家族における家長の専制は強くなる。狡猾で人に媚びへつらう人間しか財産にありつくことができないと考える父は，そんな性格を子に植えつけていく。女性は未開期と同様に隷従させられているが，この第 3 期ではあいつぐ戦争で男性相続者が不足するようになり，女性を相続者にすべく，少しずつ女性に市民権や相続権が保証されるようになる。この動きは第 5 期の「文明」につながる[18]。

第 4 期は「野蛮」である。この時期の最大の特徴は奴隷の普及である。耕作者も女性も奴隷化され，牛馬のように売り買いされる。この末期には，奴隷がカーストとして，つまり家系で分類されるようになって普及する。だが，この，労働への強制力をもつ奴隷制が大規模産業を創出する手段になった。この大規模産業は，第 8 期以降に組織される調和社会の物的基盤を準備する[19]。

第 5 期は「文明」である。一夫一婦制の婚姻と貴族封建制が成立し，妻に市民権が認められて文明がはじまる。共同体に特権が認められ，学問や芸術が発展し，産業者が解放され，代議制が成立する。航海術や化学が発達して絶頂期を迎えるが，森林の伐採がすすみ，財政は赤字が増える。ついで商業精神が普及し，株式会社が生まれる。イギリスの海上独占がすすみ，商業の競争は激化する。その後，会社も個人も借金体質が悪化し，破滅に突き進む。その末期には公営質屋が生まれ，商業の競争を抑制する動

15）*Ibid*.,, pp. 129–130（*Œuvres*, t. I, p. 92–93.）. 同書，（上），162–163 頁。なお，草稿集では，同様の文脈で幸福というかわりに「情念の発達」という表現がみられる。cf. Fourier,Ch.,“Des Lymbes obscures ou périodes d’enfer social et de labyrinthe passionnel”, *La Phalange, Revue de la science sociale*, 1re série, t. Ⅸ, Paris, 1849, p.10.

16）*Ibid*.,, pp. 12–14.

17）*Ibid*., pp. 21–25.

18）*Ibid*., pp. 27–30.

19）*Ibid*., pp. 32–35.

きがでて，産業封建制が成立する[20]。

第6期は「保証主義」である。この時期は地域株式組合（コントワール・コミュナル・アクシオネール）の設立によって特徴づけられる。これは，第5期に商業に食い物にされた農業を保護し，その商業の横暴に対抗すべく設立されるだろう。この地域株式組合は，倉庫業と生産者への資金の前貸しをおこない，商館と農産物取引所の機能をもつ。1,500人ほどの住民を擁する行政区画に一つ設立され，組合はその地区で共有する庭，穀物庫，地下室，調理場，製造作業場をそなえる。このシステムは低所得者層の生活を底上げして婚姻を容易にし，貧困がうみだす売春を防止できるだろう[21]。ちなみに，このあたりからフーリエの筆致は，第8期以降に始動するはずの農業協同組合ファランジュを論じるのとほとんど同じになる。

第7期は「粗成系列」である。これは農業協同組合ファランジュの小規模な実験がおこなわれることで特徴づけられる[22]。

以上，幼年期の第1期から第7期までの特徴を概観した。第8期には集団構成がさらに整序された単純結合系列が組織され，その後のファランジュの生産活動の単位集団となる産業集団系列につながっていく。第9期から第24期までは，第7期までのような名称はふされてはおらず，どの段階でもファランジュが地球規模で普及しているはずである。ただし，人類が享受する幸福は，第8期から第16期まで漸増しつづけて絶頂を迎え，そのあと一転して漸減していくことになる。いずれにしても，これら上昇調和と下降調和の7万年は人類にとっては幸福な時代なのである。

最後に下降混沌の時代が始まるが，その経過については少し注意したい。第26期から第32期までの各発展段階の名称をみると，上昇混沌のそれらとちょうど逆の順序にならんでいるのがわかる。上昇混沌では，混成系列，未開，家長制，野蛮，文明，保証主義，粗成系列の順になっているが，下降混沌では，粗成系列，保証主義，文明，野蛮，家長制，未開，混成系列という具合である。ただし，発生する順番が逆になっていても，そこに付されている名称が同じだから，その時期の特徴も同じかといえば，かならずしもそうではない。フーリエによれば，上昇混沌の各期は若い時代の熱情があるだけ騒々しいが，下降混沌の各期は，失われた幸福の思い出や，もう諸系列を組織できないという悲しみのために穏やかになるだろうという[23]。つまり逆の順序で継起する第26期から第32期までは，上昇混沌のそれぞれの発展段階と基本的には同じだが，ニュアンスに違いがあるようだ。

以上，8万年にわたる人類史の経過内容を概観したが，それは，上昇混沌から上昇調和，そして幸福の絶頂をへて下降調和に入り，下降混沌で終末を迎えるかたちになっており，絶頂期をターニングポイントとして前半と後半が対称的に推移していくのがわかる。

ともあれ，惑星の巨大な魂は，いずれかの惑星に宿るやいなや個々の人間の魂を放出し，そこから人類は8万年にわたって，幼年期から成長期へ，そして幸福の絶頂をへて衰退期から老衰期へ，という経過をたどる。惑星が寿命を迎えると，その惑星上で生きてきた個々の人間の魂は惑星本体の魂と融合し，その老惑星を離脱する。そして別の若い惑星に転生し，そこでふたたび個々の人間の魂が放出され，人類はふたたび8万年にわたる同じパターンの歴史を繰り返していくわけである。

したがってわれわれは，惑星の寿命とその魂

20）Fourier, *Le Nouveau monde industriel et sociétaire*, pp. 458–460（*Œuvres*, t. Ⅵ, pp. 387–388）.
21）Fourier, *Traité de l'association domestique-agricole*, t. Ⅰ, p. 550 et 558（*Œuvres*, t.Ⅳ, p.281 et 292.）.
22）*Ibid.*, t. Ⅰ, p. 559（*Œuvres*, t. Ⅳ, p. 294.）.
23）Fourier, *Théorie des quatre mouvements*, pp. 57–58（*Œuvres*, t. Ⅰ, p. 36.）. 巖谷訳，前掲書，（上），74–75頁。

の転生をつらぬく時間のなかに8万年の周期をみることができるのである。

Ⅲ．周期性を示すいくつかの事例

本節では，惑星の魂の転生のほかに，3つの事例を検討し，それらの事例に表出している別の周期を析出してみたい。まず，惑星の魂の転生に密接に関連する事例として，1.惑星の生涯8万年のあいだに，その惑星上で個人の魂が転生を繰り返すのをみる。ついで，2.ファランジュの多妻多夫制を検討し，最後に，3.ファランジュの就労形態をみよう。

1．個人の魂の転生について

すでに第二節のはじめに，惑星は魂をもち，その魂はひとつの惑星で約8万年を過ごしたのち人間の魂と融合して別の惑星に転生するということをみた。けれども，その魂の転生論には，周期性の観点からさらにひきつづいて検討すべき内容がある。

フーリエによれば，惑星の魂は，ひとつの惑星に宿るやいなや，そこで個々の人間の魂を放出する。これらの小さな魂は個々人の肉体に宿って平均寿命の100年ほどを生き，その人間が死ぬと魂はあの世にいく。あの世では人間の魂は「香気」とよばれる肉体をまとい，この世の肉体とはくらべものにはならないほど軽やかに活動する。その後，ふたたびこの世に転生し，別の人間として生きる。個々人の魂は，惑星の8万年の生涯のあいだ，こうした転生を繰り返すというのである[24]。

フーリエは，1822年に公刊した『家庭・農業組合概論』で，転生した惑星の魂は新惑星で人間の魂を放射し，そこで8万1千年の人類史が始まるとするが[25]，人間の魂は，その8万1千年のあいだ，人間の平均寿命の100年ごとに合計810回，その同じ惑星上で転生を繰り返すという。その転生回数について，つぎのような一覧表を提示している[26]。

表1　平均寿命100年とした魂の転生回数

8万1千年の区分	年数	転生回数
第1局面（幼年）	5,000年	50回
第2局面（成長）	36,000年	360回
絶頂期	9,000年	90回
第3局面（衰退）	27,000年	270回
第4局面（老年）	4,000年	40回
	合計81,000年	合計810回

個々人の魂は，平均寿命を100年とすれば，その惑星の生涯に相当する8万1千年のあいだに100年ごとに周期的に生まれ変わる。われわれの魂は，この世とあの世のあいだの往復を810回繰り返し，そうしてこの世の生を810回，あの世の生を810回，合計1,620回の生をうけるという。たとえば，第1局面(幼年)のこの世では転生回数は50回で，善良なブルジョワや善良な農民，あるいは健康な未開人といった好ましい人生もあれば，障害者，奴隷，拷問を受ける人，回教徒の牢獄に囚われたキリスト教徒のような，苦悩に満ちた人生もあるだろう。しかし第2局面(成長)から絶頂期をへて第3局面(衰退)までのこの世では，それぞれ転生回数は360回，90回，270回で，さらに平均寿命が140才ほどの快楽に満ちた人生も待っているという。また，第二節で概観した未開，家長制，野蛮，文明といった混沌期では，人々は財産も活力も長寿も享受できず，それらを不可欠

24）Fourier, *Traité de l'association domestique-agricole*, t. I, pp. 247–251（*Œuvres*, t. Ⅲ, pp. 325–330.）.

25）この『家庭・農業組合概論』では，『四運動および一般運命の理論』で8万年と記載されていた惑星の寿命が81,000年に変更されている。この変更にともなって，成長局面から老衰局面に至るまでの年数の割り振りも変更されるが，それについてはすぐあとの「平均寿命100年で見積もられる転生の一般階梯」の一覧表を参照のこと。

26）*Ibid.*, p. 243（*Œuvre*, t .Ⅲ, p. 319.），なお，表1のなかの（　）内は筆者が加筆したものである。

とする情念は抑圧されざるをえない。だからこの世で幸福を享受するには，そうした幸福の要件が十分にそろう調和期に周期的に生まれかわるしかないというのである[27]。

ともあれ，われわれは，フーリエがえがいた人間の魂の転生のありように，人間の平均寿命に相当する100年の周期を確認することができる。

さらに興味深いことに，この転生についてフーリエは，第二節の冒頭の情念分類でみた移り気情念との関連を，こうのべている。すなわち，この移り気情念は「周期的な（périodiques）変化」を求めるので，この情念を満足させるには「この世に周期的に（périodiquement）転生し，惑星の生涯をつうじて，この世で膨大な数の生存を提供する以外に方法はない」と（傍点は筆者による）[28]。このように人間の魂の転生には周期があって，その転生の反復を要請する根拠としてフーリエは移り気情念を強調するのである。

2．ファランジュの多妻多夫制について

つぎにファランジュの制度的枠組みに目を転じよう。ファランジュとは，第一節の「はじめに」で簡単にのべたように，フーリエのいう上昇調和時代と下降調和時代に社会の構成単位になる農業協同組合である。ここで注目したいのはファランジュで実施されるはずの独特な多妻多夫の婚姻システムである。

このシステムでは，ファランジュの組合員は，ある期間，一夫一婦制のようにもっぱら一人の配偶者とすごしたあと，今度は複数の配偶者とかけもちで関係しながらすごす期間に入る。フーリエは前者の愛を「利己的な愛」とよび，後者のそれを「超越的な愛」とよぶ。ファランジュの組合員は，それぞれがそんな二つの形態の夫婦生活を交互にいとなむという。しかしこれだけにとどまらず，さらに，これら二つの形態とは少し異なる関係が加わる。各組合員は，さきの二つの形態の夫婦生活をいとなみつつも，第三の形態として，一定の年数のあいだ周期的に戻っていく配偶者がいるという。しかも，周期的に戻っていくこの配偶者こそ，当該組合員にとって恋愛の中心的な相手と位置づけ，フーリエはこの形態の愛を「機軸愛」とよぶ。ただし，中心的な相手といっても，こちらも一人ではなく，数人にのぼる[29]。

この多婚システムについての説明を，いささか数字遊びないし語呂合わせといった印象をまぬがれないものの，もう少しくわしくみよう。

フーリエによれば，組合員が，その性格特性に応じて，ひとりだけの配偶者とすごす利己的な愛または排他的な愛の期間の長さ，複数の相手とかけもちですごす超越的な愛の期間の長さ，その相手の数，さらに周期的に戻っていく配偶者とすごす機軸愛の期間の長さ，およびその配偶者の数を，それぞれ規定する。これらの数字を一覧表にすると，こうなる[30]［表2を参照］。

表2の左端の縦列にみられる単一情念性格者から全情念性格者までの名称は，第二節の冒頭でみた情念分類にもとづく性格類型をあらわし

27）*Ibid.*, pp. 243–245（*Œuvre*, t.Ⅲ, pp. 319–322.）.
28）*Ibid.*, p. 242（*Œuvre*, t.Ⅲ, p. 319.）.

29）Fourier, Charles, *Le Nouveau monde amoureux, Œuvress complètes de Charles Fourier*, Paris, Éditions Anthropos, 1967,t.Ⅶ, pp. 286–287 et 291（以下，*Le Nouveau monde amoureux*, と略記）. シャルル・フーリエ，福島知己訳，『愛の新世界』，作品社，2006年，334–336頁，および340頁。なお，複数の配偶者とかけもちですごすという場合，この「かけもちで」とは，「かけもち愛で（en amour cumulatif）」を説明するものだが，これは複数の配偶者と同一の場所で同時に関係をもつということか，それとも，複数の配偶者ひとりひとりと順次交代で関係をもつということか，フーリエの説明では不明である。
30）この「ファランジュの多婚システム」の一覧表は，フーリエの「恋愛交替期間一覧」に，「機軸愛」の説明をふまえて筆者が加筆したものである。参照箇所は以下の通りである。*loc.cit.*, 同所。

表2　ファランジュの多婚システム

性格分類	1人の配偶者と過ごす期間	複数の配偶者と過ごす期間	複数の配偶者の数	同一配偶者への愛の持続期間	周期的に戻る同一配偶者の数
単一情念性格	7/8年	1/8年	1人	—	—
2重情念性格	1/2年	1/2年	2人	4年	2人
3重情念性格	1/3年	2/3年	3人	6年	3人
4重情念性格	1/4年	3/4年	4人	12年	4人
5重情念性格	1/5年	4/5年	5人	16年	5人
6重情念性格	1/6年	5/6年	6人	20年	6人
7重情念性格	1/7年	6/7年	7人	24年	7人
全情念性格	1/8年	7/8年	8人	28年	8人

ている。ちなみに，単一情念性格者をのぞいて二情念性格者から全情念性格者までは多情念性格者とよばれる。

これらの名称について確認しておこう。第二節の冒頭ですでにみたように，フーリエは情念をまず感覚情念，集団情念，配分情念の3つに区分した。その感覚情念は，味覚，触覚，視覚，聴覚，嗅覚の5つの情念に，集団情念は，友情，恋愛，野心，親子といった5つの絆をめざす情念に細分した。そして配分情念は陰謀情念，移り気情念，複合情念の3つに細分した。つまり情念を基本的には3つに，細かくは12に区分した。なお，4つの集団情念と3つの配分情念は，まとめて「魂の情念」ともよぶ。

フーリエによれば，これら合計12の情念のさまざまな組み合わせで多様な人間の性格が形成されるという。上記の情念性格類型は，それら12の情念の組み合わせに由来しているのである。「単一情念性格」は，12の情念のいずれか一つを「支配的な情念」としてもつ。つまり，12の情念のうちの一つが非常に強い性格を意味する。なかでも恋愛情念，野心情念，味覚情念を支配情念とする場合が多いという。以下，「二情念性格」から「六情念性格」までは，それぞれ2つから6つまでの「魂の情念」からなり，「七情念性格」は6つの魂の情念と1つの感覚情念からなる。そして「全情念性格」は7つの魂の情念からなるという。以上が性格類型の名称の基本的な意味合いである[31]。

表2の2列目に示される期間は，もっぱら1人だけの配偶者とすごす期間をしめす。これをみると，単一情念性格者は1年のほとんどを1人の配偶者とすごすが，性格を規定する情念の数が多くなるにつれて，順次その期間は短くなる。それは同時に，表2の3列目の数字がしめすように，複数の配偶者とすごす期間が順次長くなることと対応している。しかも4列目にあるように，性格を規定する情念の数が多くなるにつれて，その配偶者の数も8人まで増えていく。さらに，比較的長い期間に周期的に戻っていく配偶者についても，情念の数が多くなる情念性格者ほど，より長い期間に周期的に戻っていくべき，より多くの配偶者をもつのがわかる。

フーリエが構想した多婚システムの基本は以上のようなものであったが，われわれは，ここにも周期をみることができる。まず，1人の配偶者とすごす時間と，複数の配偶者とすごす時間とは，それぞれの情念性格者によって異なるものの，1年を二つの形態の関係に割り振っているため，この両者への時間の分割比率に周期をみることができるだろう。たとえば全性格者は，1/8年を1人の配偶者とすごすと，残りの7/8年は別の配偶者とすごす。全情念性格者は

31）これら「単一情念性格者」から「全情念性格者」までの名称の意味合いについては，『産業的協同社会的新世界』の説明を参照した。その参照箇所は次のとおりである。Fourier, *Le Nouveau monde industriel et sociétaire*, pp. 403–406 (*Œuvres*, t.Ⅵ, pp. 340–342.).

この交替を繰り返す。各情念性格者の時間の割り振りの比率はそれぞれ異なるものの，そこに周期があるのは同様である。

さらに，相対的にもう少し長い期間，つまり4年から28年といった期間に，固定した配偶者のもとに戻っていくという「機軸愛」でも，すでにみたように，具体的な周期ははっきりしないものの，周期的に戻っていくという表現が明示的に使われていた。このように，多婚システムの構想にあっても，フーリエは，周期を組み込んでいたことが確認できる。

多婚システムの分析を終えるにあたって，この文脈における周期性と移り気情念との関連をみておきたい。ここでは『愛の新世界』から，それらの関連をしめす叙述をひこう。「自然は恋する者たちにたいして恋の相手を排他的に所有する性向を賦与している。だからその性向は自然の正義であって悪ではない。私はその性向をけっして咎めはしない。むしろその性向を根本的な性質とみなして弁護さえしよう。この性質は調和社会において特定の役割をもつだろう。つまり交替情念（＝移り気情念）の法則にしたがって，恋する人は，周期的に，この性質に舞い戻ってくることになるだろう」［（　）内および傍点は筆者による］[32]。

このように，単婚と多婚の周期的な交替が，恋人たちにとっては変化をつけるアクセントになり，かれらの移り気情念の充足につながるとフーリエは考えていたのがわかる。つまり，単婚と多婚の周期的交替についても，それらを要請する根拠としてフーリエは，移り気情念を強調したのである。

3．ファランジュにおける就労形態について

最後に，ファランジュにおける組合員の就労形態に注目しよう。

ところで，フーリエは，どのような働き方をすれば労働が快楽になるかと考えて，ファランジュ固有の労働のあり方を設計する。ここでも最重要課題は情念の充足，とりわけ配分情念の充足であって，これらの情念をみたすような労働のあり方をフーリエは工夫していた。フーリエは労働の組織と就労の形態をわけて論じているわけではないが，まず，労働の組織面の基本的なところからみていこう。

ファランジュではすべての活動が集団化される。つまり家事・育児はもちろん，消費活動全般にわたって集団化され，生産活動も集団化される。この生産活動は，共同生活に必要な生産物の種類におうじて150ほどの生産部門に区分され，そのそれぞれの部門で「産業集団系列」とよばれる集団が生産に従事する。この産業集団系列がファランジュの生産活動の基本単位である。産業集団系列では，作業が7つほどに分割され，そのそれぞれに1つの班がわりふられる。これらの班はそれぞれ2つから8つの小手集団で構成され，これらの小集団は産業集団系列のなかでは合計30くらいにのぼる。各小集団は，たとえば7人くらいで構成される。要するに，ファランジュには150ほどの産業集団系列という労働の組織単位があり，この各集団系列は7つほどの班に編成された30ほどの小集団で構成されるわけである[33]。

このように産業集団系列が班や小集団に細分されるのには，フーリエなりの理由がある。その一つ目として，作業を細分すると作業内容が単純化され，それだけいっそう人々がその作業に入りやすくなり，仕事への熱中を促進できるということがあげられる。これは「複合情念」の充足につながるという。二つ目として，作業を細分化していけば類似した作業ないし類似した成果が生じ，そうした仕事に従事する集団や班のあいだには作業の成果や生産物の品質をめ

32）Fourier, *Le Nouveau monde amoureux, Œuvres*, t. Ⅶ, p. 86, 福島訳，『愛の新世界』，103頁。

33）Fourier, *Théorie des quatre mouvements*, Note A., pp. 403−418（*Œuvres*, t. Ⅰ, pp. 292−306.）. 巖谷訳，前掲書，171−194頁。

ぐって対抗心ないし競争心が発生しやすいということがあげられる。これは「陰謀情念」の充足につながるという。そして最後に，仕事を細分化すれば，人々に多く種類の仕事が提供できるということがあげられる。その豊富な選択肢から各人が仕事を自由にえらび，しかも短時間で順次に仕事を変えていけば，人々は倦怠を感じることなくいつも楽しく作業ができる。これは移り気情念の充足につながるという[34]。

この最後の，移り気情念を充足させる労働のあり方は，フーリエが提起した独特の就労形態であって，本稿のテーマである周期性を考えるうえで重要である。そこでこの事例について，もう少し詳しくみてみよう。

フーリエが移り気情念を充足する就労形態を説明する文脈に注目し，まず，そこにある移り気情念の説明からみる。フーリエは，こうはじめる。すなわち，この情念は「周期的な変化，対照的状況，場面の転換，魅力的な出来事，および，幻想を醸成し，感覚と魂の両方を刺激するのに適した新奇さにたいする欲求である」と（傍点は筆者による）。ここでは移り気情念の欲求対象として「周期的な変化」が明示されていることに注目したい。さらに「この欲求は，1時間ごとに穏やかに感じられ，2時間ごとに激しく感じられる。もしそれが満たされなければ，人間は情熱を失ったり倦怠を感じたりする」という[35]。つまり周期的な変化をもとめる欲求そのものが，1時間ないし2時間ほどの周期で強弱のリズムをきざんでいるというのである。

この移り気情念をふまえてフーリエは，「短期就労」となづけたファランジュ独特の就労形態をつぎのように説明する。すなわち「ひとつの作業の就労時間を1時間半，ないし長くても2時間というきわめて短い時間にかぎることによって，だれもが1日のあいだに7種類か8種類の魅力的労働をこなし，翌日にはまた仕事をかえて，前日の集団とは異なる集団で仕事をすることができる」と[36]。仕事の選択は個人の自由にゆだね，各人が移り気情念のリズムにしたがって1時間半から2時間ごとに仕事をかえていけば，情熱をなくしたり倦怠を感じたりせず，楽しんで働けるというわけだ。一つの仕事に飽きそうになればすぐに別の作業場に向かうことができる。また，それにともなって作業をともにする集団にも変化がつき，より多くの人と知り合い，かれらとの絆を広げていけるだろう。そのうえ個々人が肉体の特定部分だけを不断に酷使するのもさけられよう。就労形態をこんなふうにすれば，社会生活に必要なきつい仕事でも快楽ないし楽しみに変わるだろう。なお，さきの引用箇所にみられる「7種類から8種類の魅力的労働」の「魅力的」というのは，楽しくて人々を惹きつけるという意味合いをもつが，フーリエはこれを「産業引力」が作用すると表現する[37]。

以上，移り気情念とその要請に応じた労働のあり方についてみてきたが，その就労形態をふまえてフーリエは，ファランジュのなかでも相対的に貧しい階層のリュカという名の組合員の6月の日課を，つぎのように紹介している[38]。

34）Fourier, Le *Nouveau monde industriel et sociétaire*, pp. 64–66（*Œuvres*, t.Ⅵ, p. 53–54.）. なお，ここに紹介した内容は，労働のあり方と充足される情念との対応関係をフーリエ自身の用語で紹介すると，「部分就労」と複合情念の充足，「緊密性」と陰謀情念の充足，「短期就労」と移り気情念の充足，という組み合わせになっている。こうした表現は，最晩年の著作『贋産業論』においても同様に，次の箇所で確認できる。Fourier, *La Fausse industrie*, t. I, pp. 368–370（*Œuvres*, t.Ⅷ, pp. 368–370.）.

35）Fourier, *Le Nouveau monde industriel et sociétaire*, pp. 79–80（*Œuvres*, t.Ⅵ, p. 66.）. 田中訳，前掲書，501頁。

36）*Ibid.*, p. 80（*Œuvres*, t.Ⅵ, p. 67.）. 同所。

37）*Ibid.*, pp. 83–93（*Œuvres*, t.Ⅵ, pp. 69–78.）. 同書，504–514頁。

38）*Ibid.*, pp. 80–81（*Œuvres*, t.Ⅵ, p. 67.）. 同書，501–502頁。

表3　6月のリュカの日課

3時半	起床、身支度
4時	厩舎集団での就労
5時	庭師集団での就労
7時	朝食
7時半	草刈集団での就労
9時半	天幕下の野菜栽培集団での就労。
11時	牛小屋系列での就労。
1時	昼食。
2時	森系列での就労。
4時	製造所集団での就労。
6時	灌漑系列での就労。
8時	取引所。
8時半	夕食。
9時	楽しい交流。
10時	就寝。

この日課をみると，リュカは，就労をはじめ，食事や娯楽もふくめて1時間から2時間ごとに活動内容を変えているのがわかる。就労する集団も，厩舎集団，庭師集団，草刈り集団，野菜栽培集団，牛小屋系列，森系列，製造集団，灌漑系列という具合に，短い時間でつぎつぎに変わっている。なお，リュカが午後8時に向かう取引所というのは，投機目的で国債や商品を取引するところではなく，仕事や娯楽の集まりを割り振りするところである[39]。

ともあれ，ファランジュで生活する組合員は，移り気情念を根拠にして短時間ごとに仕事内容を変えていくのがわかるだろう。われわれは，そこに，1時間から2時間あるいは1時間から1時間半の周期を確認することができるのである。

Ⅳ．おわりに

さて，これまで本稿では，フーリエの思想をかたちづくる，多岐にわたる諸観念の内的な結びつきを理解する手がかりをえるために，その宇宙論と農業協同組合論に着目し，これらの両方に表出している時間の流れ方を分析してきた。そしてその特徴として周期性を確認することができた。フーリエが宇宙の移り行きを論じる場合にも，農業協同組合における日常を論じる場合にも，それぞれの時間の流れのなかに周期がきざまれているのが明らかになったであろう。

第二節では，まずフーリエの情念論をごく簡単に紹介してから，魂をもつ惑星の転生について分析した。惑星は8万年の寿命をもち，その寿命が尽きると，惑星の魂はそこで生きてきた人間の魂と融合して老いた惑星を離脱し，別の若い惑星にやどって転生する。この転生は繰り返されるのであって，惑星の寿命である8万年がその転生周期に相当するのを確認した。さらに8万年にわたる惑星の生涯の移り行きをたどり，混成系列，未開，家長制，野蛮，文明，保証主義，粗成系列，そしてファランジュが組織される調和の各期をへて幸福は増大し，絶頂期を迎えたあと幸福は減少し，今度は粗成系列，保証主義，文明，野蛮，家長制，未開，そして混成系列という順に，つまり絶頂期を中心にほぼ前後が対称的なかたちで歴史が展開し，ついには終末を迎えるのを概観した。そして，ここで確認した周期性は，たんに8万年という時間的長さについてだけではなく，8万年にわたって繰り広げられる人類史のパターンについてもみられることを明らかにした。

ついで第三節では，惑星の魂の転生のほかに，1.個人の魂の転生について，2.ファランジュの多妻多夫制について，3.ファランジュにおける就労形態について，それぞれ分析した。まず一つ目の個人の魂の転生について，個人の平均寿命を約100年とすると，惑星上で繰り広げられる8万1千年のあいだには合計810回の転生がおこり，個人はじつにさまざまな境遇の人生をおくることになる。そしてこの多様な人生をおくることが移り気情念の充足につながるのをみた。

39）*Loc.cit.*, 同所。

つぎに二つ目のファランジュの多妻多夫制について。ファランジュの婚姻性は，多妻多夫制といっても，それは利己的な愛，超越的な愛，機軸愛という3つの形態の婚姻関係を包含していた。つまりひとりだけの配偶者と関係を維持する利己的な愛，複数の配偶者とかけもちで関係を維持する超越的な愛，そして一定年数のあいだ関係を維持する機軸愛，これら3つの形態である。前二者については，1年を利己的な愛の期間と超越的な愛の期間に分割し，両形態の婚姻関係を交互に周期的にいとなむ。第3の機軸愛については，所定の年数のあいだ，特定の複数の配偶者のもとへ周期的に戻っていくという行動パターンを確認することができた。こうした，いわば単婚と多婚の周期的な交替が，移り気情念の充足に大きな役割をはたしているのも明らかになった。

最後に，三つ目のファランジュにおける就労形態について。フーリエによれば，移り気情念は周期的な変化を求め，その情念は2時間ごとに激しく感じられる。この移り気情念にみあうようなかたちで，フーリエは，組合員がみな楽しく働けるような就労形態を設計する。つまり作業をこまかく分割し，1時間から2時間ごとに組合員が各種の作業場を自由に飛び回れるような短期就労形態を考案する。この短期就労なら各組合員は1日に7種類から8種類の作業集団で仕事し，それぞれの仕事場で労働を通して多くの絆もつちかっていくことができるだろう。このようにわれわれは，移り気情念を根拠にして短時間ごとに仕事内容を変えていく労働形態と，その仕事の変更にかかわる1時間から2時間あるいは1時間から1時間半の周期を確認することができた。

ともあれ以上で，フーリエの宇宙論と農業組合論に表出している時間の流れ方には周期性があること，さらにその周期性の根拠として，多様性ないし変化をもとめる移り気情念が重要な役割をはたしていることも明らかになったであろう。

さて，本稿の第二節では，惑星の魂の転生と8万年にわたる惑星の歴史について検討したが，「はじめに」で指摘しておいたように，ヴィクトル・コンシデランは，フーリエの教説を解説するなかで，周期性がきわだつ惑星の魂の転生をどう取り上げたか，その取り上げ方を，フーリエ派のバイブルとされる『社会の運命』で検証し，むすびにかえたい。

コンシデランは，この『社会の運命』の第1巻では，まず文明批判を論じ，それに続いて歴史的な発展のあり方をとりあげる。その箇所では，フーリエの人類史ないし惑星史の枠組みは踏襲しているようにみえるものの，8万年周期でおきるとされる魂の転生にかんする記述はない。コンシデランは8万年という具体的な年数や魂といった表現はことごとくさけ，さらに，惑星は両性具有の生き物であるというかわりに「植物であれ動物であれ人間であれ，地球であれ宇宙の渦巻きであれ，すべては生と死の一般法則にしたがう」という言い方をする。そのうえ，宇宙の物質の量が一定であるように，宇宙に存在する生命力の総量も一定だとし，この力（フォルス）は，惑星上で無数の生物に個別化して，誕生，上昇運動をへて最大になり，下降運動から死にいたってゼロになるという具合に惑星の生涯を説明する[40]。このあたりでは，フーリエのえがいた惑星の8万年にわたる生涯を，「魂」や「情念」のかわりに「力」という言葉をもちいて説明している。

ついで「運動の一般形式」と題して，惑星の時間的推移をつぎのようにパターン化している[41]［図2を参照］。

人類の発展を包括的に論じる文脈の最後に終末をむかえる地球の老衰と衰弱に言及し，こうしめくくる。すなわち，「人類は，じょじょにその力と伝統を喪失しながら未開社会におちい

40）Considerant,V., *op.cit*., pp. 136−138.
41）*Ibid*., p. 139.

図２　運動の一般形式

上昇移行	または	誕生
第一局面	または	幼年
第二局面	または	若年
絶頂と充満	または	成熟
第三局面	または	衰退
第四局面	または	老衰
下降移行	または	死

り，最後の光を放って，歳月に打ちのめされた老人のように消滅する。老人にあっては，あらゆる能力が衰弱して命が消える。そしてこの終わりは新しい秩序の存続期間の始まりになる」と[42]。

この説明をみるかぎり，フーリエが展開した惑星の魂の転生論は引き継がれているようにはみえる。コンシデランも人間的事象でもって惑星の物理的推移を説明しているようにみえるが，魂の転生や惑星は生き物だという表現がないだけフーリエの趣旨は曖昧になり，人間的事象と物理的事象のへだたりは大きくなっているようにおもわれる。つまり，フーリエにあっては物理的事象と人間的事象とのあいだの濃密な関係が息づいていたのにたいして，コンシデランにあってはそれが死滅しており，物理的事象の説明にもちいられる人間的事象がたんなる比喩にすぎなくなっている印象をうけるのである。フーリエの思想に息づいている周期性の感覚も，それだけ弱く，わかりづらくなっているのではないか。

ちなみに，人類史のこうした全般的説明のあとに，コンシデランは，フーリエの表現どおりに，第１局面つまり幼年期の第１期から第７期までの図式を挿入する[43]。そして第１期の原初の楽園から第４期の野蛮まで論じ，そのあと第５期の文明の詳しい分析に入っていく[44]。それらはみなフーリエの説明を踏襲しており，非常にわかりやすくまとめられているということを，ここにつけくわえておこう。

ところで，自由恋愛や新種の有益な生物の創造など，荒唐無稽で世間の反感をかうようなフーリエの表現をコンシデランが解説から適宜削除したのは，つとに指摘されていた[45]。けれども，魂の転生を前提にしたフーリエの人類史ないし惑星史については，上記のとおり，削除されずにあった。とはいえ，この部分についてはいま指摘したように，フーリエの思想の根幹にかかわるところで改変されているのであって，それだけにこの箇所は，フーリエとコンシデランの相異点がうきぼりになっていて興味深い。

フーリエの教説を，コンシデランがこのように改変していたとしても，この改変を，理工科大学校で最新の物理学や化学や数学を学んだコンシデランひとりに帰するのは，かならずしも公正ではないだろう。かれこそフーリエの教説の普及を一心に願い，師の教説をすこしでも多くの読者や聴衆に受けいれられやすい言葉で論じようとしたのだから。それを考えあわせれば，社会改革に目をむけてコンシデランのまわりに集まってきた人々が，コンシデランをしてフーリエの思想を時流に合わせたかたちに改変させた，ともいえるだろう。

本稿で析出したフーリエの周期性は，いわばフーリエの情念がきざむ内的なリズムであったのではないか。もしそうであったとしても，コンシデランをはじめ，かれをとりまく人々も，すでにそのリズムを感じ取られなくなっていたのかもしれない。

追記　本稿の作成あたっては，小樽商科大学附属図書館所蔵の手塚文庫および北海道大学附属図書館の蔵書を利用させていただいた。両図書館のスタッフの方々にこの場をかりて心よりお礼を申し上げたい。

42）*Ibid*., p. 142.
43）*Ibid*., p. 143.
44）*Ibid*., p. 145 seqq.
45）Dommanget, Maurice, *Victor Considerant. Sa vie, son œuvres*. Paris, 1929, p. 17.